

真宗福祉活動の構造・試論

林 弘 幹
(真宗教学研究所助手)

はじめに

社会学の観点から社会福祉活動をみた場合、それは社会的行為としてとらえることができる。そして社会的行為の基本的要件としてM・ウエーバーは、動機と他者関係性の満足をあげており、その動機たるもののひとつとして、彼は宗教的信念をあげている。

さて、ヒューマニズムを他者へのはたらきかけの基盤とし、幸福の追求、自助への援助をその目的とする今日の社会福祉活動において、真宗の教えに生きるものにあっても、社会的行為として、必然的に社会福祉活動が出てくるものかどうかについて考えてみたい。つまり、現世否定と自力否定を旨とする真宗の教えが、社会的行為とし

ての福祉活動の動機たり得るかどうか。もし動機とならないとすれば、どういう行動が可能か、そういった構造をみていこうとするのが、本論のねらいである。

一、真宗福祉活動の実態

真宗の教えが、はたして社会福祉活動の動機たり得るかどうかについて論ずるまえに、まず、真宗教団におけるその実態からみていくことにしよう。

真宗教団といっても、十派⁽¹⁾を数えることができるわけだが、ここでは資料の関係上、浄土真宗本願寺派(以下、本派という)および真宗大谷派(以下、大谷派という)の実態についてみていくことにしたい。

保育所や老人ホームなどに代表されるところの社会福祉施設の開設率をみてみる

表2 社会福祉施設数(大谷派)

施設の種類	施設数	開設率(%)
保育所	461	5.0
託児所	95	1.0
その他の福祉施設	34	0.4
計	590	6.4
寺院総数	9,283	100.0

- (1) 昭和45年11月現在
(2) 「第三回・真宗大谷派教勢調査報告書」より作成

表1 社会福祉施設数(本願寺派)

施設の種類	施設数	開設率(%)
保育所	707	7.0
託児所	170	1.7
その他の福祉施設	94	0.9
計	971	9.6
寺院総数	10,074	100.0

- (1) 昭和45年6月現在
(2) 「浄土真宗福祉白書・52年版」より作成

と、表1・表2のようになってゐる。各派それぞれ全寺院数に対する社会福祉施設の開設率は、本派9.6%、大谷派6.4%となっている。さらにその施設、種類についてみると、保育所の開設が多いことに気づかされる。本派にあつては全寺院の7.0%、大谷派にあつては5.0%を占めてゐる。さらにそれを、両派における社会福祉施設全体のなかで占める割合からみるならば、本派72.8%、大谷派78.1%という高い数値が出てくる。このことは、本派および大谷派に限つていえば、その社会福祉施設の開設情況については、保育所の設置が圧倒的に多いといふことが知られるのである。これは、民間社会福祉事業における保育所の占める割合、60.0%⁽²⁾という数値と考えあわせてみても、うなずけるところである。

このように、真宗教団にあつては、多数の寺院において社会福祉施設を開設しているわけであるが、それがはたして近代社会福祉理念の見地に立つて運営されてゐるのか、あるいは、教化の延長線上に位置するものとして運営されてゐるのか、この資料からは何も分らない。

しかし、真宗における社会福祉事業は教化の一環としての福祉活動なのか、あるいは近代社会福祉理念ののつた福祉活動なのか、この点については、はっきりさせておかねばならない。なぜならば、社会福祉理念をしつかりおさぬままに、福祉活動を行なおうとするならば、行為主体者にとつても、また、対象者にとつても、さらに福祉そのものにとつても、その本来の使命を損なうことになるからである。

だが、教団にあつてはおおむね「宗門寺院の福祉施設は、寺院関係者が近代社会福祉の理念やそれについての専門的知識をもたないままに、宗教教化の一環をなすものとして設立され⁽³⁾」てきたものが多いと思われる。つまり、信仰をその基本的動機とする点においては同じであるが、その方向性が近代社会福祉理念の実現を目ざしてのものではなく、宗教教化の一環として、教化の場として社会福祉施設や福祉活動が位置づけられてきたといえるのではなからうか。その一例として「益々多様化、複雑化する諸問題のなかで、真宗保育は、その人間形成の目標、弥陀の五劫思惟の願をよくよく

案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなり云々」が、教育の場でどこまでおしすすめられてゐるのでありましょうか⁽⁴⁾。ということばがあげられる。このように、ここでは保育を教育あるいは教化の一環として位置づけていることがうかがえるのである。

しかし、本論で問題にしようとしてゐることは、このことではないのである。教化活動の延長線上に位置する社会福祉活動ではなく、近代社会福祉理念に基いた福祉活動を問題にしようとしてゐるのである。

真宗の教えが、はたして社会福祉活動の動機となり得るのかどうかという問題を、よりはっきりさせるため、以下、諸宗教の教義と対比しつつ社会的行為の観点からとらえなおしていくことにしようと思う。

二、社会的行為

社会福祉活動は、個人の内なる幸福を求めて行なう祈願的な行為ではなく、具体的対象者をもつた行為であり、そこに社会的行為としての意味が成り立つ。

周知のごとく、社会学をして「社会的行為を説明しつつ理解し、そうすることによ

って社会的行為の経過や結果を因果的に説明しようとするひとつの学問である⁽⁵⁾と定義するM・ウェーバーによれば、社会的行為とは「単数または複数の行為者によっておもわれたその行為の意味にもとづいて他人の行動に関係づけられ、しかもその行為の経過が他人の行動に方向づけられているような行為のことをいうのである⁽⁶⁾」といっている。つまり、ある行為が社会的となり得るかどうかは、一、行為者が主観的意味を付帯せしめていること。いいかえれば、動機をもつということ。二、他の人々の行動との関係づけ、ないし他の人々への志向性をもつということ、この二つを満足させることにより、はじめて、その行為は社会的行為と呼ばれ、科学的意味理解の対象となり得るのである。

そして、この「動機」というものについて彼は「動機とは、行為者自身または観察者にとって、ある行動の意味的な「根拠」だともまれる意味連関のことをいう⁽⁷⁾」と述べている。このようにおさえたいうえて彼は、社会的行為の動機たるもののひとつとして、経済的欲求などとならんで宗教的信

念なるものをあげている。このことはすなわち、ある宗教教義内容の体得が、社会的行為の動機となり得ることをいっているわけである。

ところで、いまここで社会福祉活動を社会的行為としてとらえ、それを分析していこうとする本論の真意は、真宗の教義体系が、いわゆる社会福祉活動の動機たり得るかどうかを説明することにある。

このように社会福祉活動を社会的行為の観点からアプローチしていこうとする態度は別に新しいことではなく、すでにひとつのモデル図式が作られているので、それに則って考察していくことにしたい。

図1のごとく、行動変数を独立・媒介・従属の各変数に分解して、それぞれのところから社会福祉活動に焦点をあてて、みていこうとするものである。

そこで、独立変数としての宗教教義が、媒介変数としての行為主体者の内に、どのような動機づけ、あるいは態度の方向づけを行ない、その行為主体者に対して、どのような行動・態度をとらせるのか、あるいはとらせないのかを図式的に考察してみた

第1図 仏教社会事業研究に関する理論的枠組

照準枠	宗 教	教 団	社 会
構 造	教 義	宗 派 宗 団 (寺院・信徒集団)	歴史的・社会的現実態 (社会制度・大衆社会)
性 格	価値体系 教判性 規範性	制度的順応 凝集性 帰属慣性	資本主義社会体系 變動理性 合目的性
行動変数	独立変数 (行為主体に働きかける 社会的・宗教的影響力)	媒介変数 (行為主体みずか らの動機・態度)	従属変数 (行為主体の実践活動)
行動内容	社会事業活動主体 の理念的根拠	社会事業活動主体 の主體的契機	社会事業活動主体 の「もつ対象・領域

中垣昌美他「仏教福祉事業の研究」(龍大『仏教文化研究所紀要』所収)

い。

ある態度決定をなす背景として重要な役割を演ずるのは、独立変数として位置する諸要因である。ここでは、宗教教義がその要因として浮かびあがる。

さて、社会福祉活動は、きわめて現世的かつ人間中心的な行為であるが、それに対して来世を讃え、人間中心主義を排する諸々の宗教にあつては、社会福祉活動にどのようなに取り組んでいるのであろうか。宗教といつてもたくさんあるが、ここでは大乘仏教およびキリスト教における社会福祉活動の行動根拠を探りつつ、厭離穢土・欣求淨土、自力否定、および現世利益を求める心を否定する真宗にあつてはどうであらうかという方向で、順次みていくことにしよう。

三、諸宗教における社会福祉活動の行動根拠

(1) 大乘仏教の場合

ここで単に仏教といわずに、大乘仏教（以下、仏教という）と厳密にいう理由は、「いわゆる小乗に対する。その特徴は、自利よりも広く衆生を救済するための

利他行を實踐し、それによって仏となることを主張する点にある」という見解にもとづくものであり、その思想のなかに、すでに社会福祉の要素が含まれているからである。

さて、仏教における社会福祉活動の行動根拠は一般的に大乘菩薩道の實踐に求められるところである。この大乘菩薩道の實踐を支えるものは、『智度論』に「慈は仏道の根本なり。慈は樂を与え、悲は苦を抜く」といい、さらに「大悲は大乘の本なり」と述べられているごとく、他者のいたみを我がいたみとする慈悲の精神である。このように、上求菩提・下化衆生という求道の姿にあつて、特に強調されることは、他者の存在である。そして、大乘菩薩道を歩む者の、慈悲の實踐方法として位置するのが、福田思想と呼ばれるものである。

福田とは、幸福を育てる田地の意であり、これに布施すれば、よく福を生じるものをいう。その種類としては、二福田とか三福田、八福田などいろいろ数えられるが、例えば三福田を例にとつてみれば、父や僧伽など敬うべきものを敬田といい、父

母や師長の恩など敬うべきものを恩田といい、貧困者や病者などを悲田といっている。その他、橋をつかけたり、井戸を掘ったりすることがあげられている。いずれも、これを行することがすなわち菩薩たることの証しであるとされていたのである。この福田思想の具体的な姿は、聖徳太子や行基菩薩の歩みにみることができよう。福田思想は、我国における社会福祉事業の発達に大きな役割を果たしたのであった。

このように、仏教における社会福祉活動は大乘菩薩道の實踐としての慈悲の教えが独立変数として行為主体者に働きかけ、その結果として、さまざまな社会福祉活動がなされてきたことが明らかになったのである。そして科学的方法論のみが先行している今日の社会福祉事業にあつて、この大乘菩薩道の精神こそ「現代の社会的要請にたえることのできる、しかも新時代にたちむかう、新しい指導原理⁹⁾」になるであらうと期待されているところである。

以上が社会的行為からみた仏教における社会福祉活動の概要であるが、愛の精神を説くキリスト教にあつてはどうであらう

か。これまた社会福祉事業とはたいへん深いつながりのある宗教であり、次に、キリスト教についてみていくことにしよう。

(2) キリスト教の場合

キリスト教における福祉思想を代表するものにカリタス(caritas)がある。慈善とか、キリスト教的愛、同朋愛、隣人愛などと訳されるが、神の正義としての隣人愛の実践を意味することばである。

この、神の正義としての隣人愛の実践とはどういうことなのか。それを伝える比喩があるので、それをみていくことにしよう。それはルカによる福音書のなかに述べられている物語であり、一般的に「よきサマリヤ人のたとえ」と呼ばれているものである。

イエス在世中に、ある学者がイエスから「隣り人を愛せよ」といわれた時、私に与って隣人とは誰をさすのか、という問に對して出された譬え話である。

ある旅人がエルサレムからエリコに下っていく途中、強盗に襲われ、深傷を負い、

道端に倒れていたところ、そこへ三人の男が通りかかった。まず最初は、祭司が通りかかったが、この祭司は倒れた人を見ると、道の向う側を通って行ってしまった。

次に当時のユダヤ社会ではエリートとされていたレビ人が通ったが、これまた、道の向う側を通っていった。そして三人目に通ったのが、サマリヤ人と呼ばれる、当時の社会にあつては下層とみなされていた人であるが、この人のみがその旅人の側にかげより、彼を気の毒に思い、傷の手当をし、自費でもって宿屋に投宿させたという話を語った。そこでイエスは、この強盗にあつた人にとって誰が隣り人となつたかと問い返したということである。もちろんサマリヤ人であるが、この譬え話のなかに、キリスト教における社会福祉原理が示されているように思われる。

つまり、隣人を愛するということは、隣人になるということであり、その人の立場に自分の身を置きかえることである。このことは社会福祉活動の動機づけを考える場合、非常に大切なことである。そして、隣人が求めているものを与えるという行為、

その行為は「私のようなものが、神によつて隣り人のために用いられた」というよろこびと、人間理性を越えたところからの行為であるという構造をもっている。

ところで、キリスト教における社会福祉活動を語る場合、看過してはならないこととして、ヒューマニズム思想がある。ヒューマニズムの問題については後に述べるつもりであるが、「わたしたちは、現代のヒューマニティの運動の多くの動向のなかに、本質的なキリスト教的遺産を発見することができよう」と語られ、あるいは「社会事業の面が、いずれもヒューマニズムに発するものであり、多くは明治以来のキリスト教の博愛の精神に支えられた民間的のものであつたことがみられるのである」という証言からも、その影響力を十分うかがい知ることができよう。

このように、キリスト教にあつては、隣人を愛せよという教えが行為主体者に働きかけ、そこから社会福祉活動が行動となつて現れてきていることが明らかとなつたのである。

さて、これまで仏教およびキリスト教に

おける社会福祉活動の行動原理をおおざっぱにみてきたのであるが、では、本論の中心テーマであるところの真宗ではどのような構造をもっているのだろうか。次に、それをみていくことにしよう。

(3) 真宗の場合

真宗もまた、仏教の一派であることにちがいないわけであるが、それをあえて別立した理由は、その教えの特殊性にある。すなわち、社会福祉活動を考える場合、現世利益を求める心を否定し、自力によるはかりを否定する真宗の教えにあつて、幸福を求め、人が人を援助するという社会福祉活動は、いったいどのような行動原理でもって展開されるのかということである。

この問題について、恵信尼文書と歎異鈔のなかから、その方向性を探ってみようと思う。

親鸞が流罪地・北陸を離れ、関東の地へ行く途中、ある所で、飢えに苦しむ人々を前に三部経の千部読誦をしようとして、中止したことがある。当時の社会にあつては、天変地異等に対して、ひたすら民衆や

国家のためを思つて祈禱することが、出家者の一般的な姿だつたと思われる。親鸞は、このような態度を比叡山時代に身につけたわけだが、山のありように満たされないうものを感じ、やがて山を下りて法然の門に入つたのであつた。その時点からすでに十数年が経つた後、このような悲惨な眼前の光景に出会つた時、親鸞の脳裏によぎつたのが、あの比叡山時代の思い出だつたのである。

この三部経千部読誦の中止ということについて、妻・恵信尼が、その子・覚信尼に宛てた手紙によれば「この十七八年がそのかみ、げにげにしく、三部経を千部読みて、衆生利益の爲にとて、読みはじめてありしを、これは何事ぞ、自信教人信、難中転更難とて、身づから信じ、人を教へて信せしむ事、まことの仏恩を、報み奉るものと信じながら、名号の外には、何事の、不足にて、かならず、経を読まんとするや、と思かへして、読まざりしことの、さればなほも、すこし、残るところのありけるや、人の執心、自力の心は、よくよく思慮あるべしと、思ひなして後は、経読むこと

は、止まりぬ」(第五通)と記されている。その発想においては、他者のいたみを我がいたみとする大乘菩薩道の心なのだが、なぜ三部経千部読誦を思いたたねばならなかつたのか、そしてすぐさま中止せざるを得なかつたのか、ここに親鸞の深い苦悩を見る思いがする。

そして、このような体験を通して「慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものを憫み悲しみ育むなり。然れども、思ふが如く助け遂ぐることを極めて有りがたし。また浄土の慈悲といふは、念仏して急ぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて思ふが如く衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかに愛し不便と思ふとも、存知のごとく助け難ければ、この慈悲始終なし。しかれば念仏申すのみぞ、未徹りたる大慈悲心にて候べき」(歎異鈔第四章)ということばが生まれたのである。

我が力でもって何ごとかをしようとする時、それはあまりにも不完全であり、体験的に我が身の限界を知らされたのであつたわけだろう。しかし、だからといって、眼前の事実から眼をそらしたわけではなく、

どうしようもできぬ我が身の限界に眼をすえ、そのうえで人々と共に生きていける道を模索したのであった。そして見出したのが、自己の立脚地をしっかりと見すえるということであつたのである。それによりどのような社会状態や境遇におかれようとも、この与えられた命を十全に生きることこそ最も大切なことであると思ひ至つたのである。

ここに、親鸞の慈悲観は、すでに大乘菩薩道の実践としての慈悲を越えたものとなつたのである。そして、その思想のなかに、極めて強烈な人間への愛、否、生あるもの全てへの愛がみなぎっているのを知られるのである。

以上みてきたごとく、真宗にあつては、いわゆる幸福を求め、人が人を援助するという形態での社会福祉活動の動機とはなり得ないといつてよいだろうと思うのである。親鸞にあつては、幸福よりも、もつと根源的な方向へと眼をすえていつたのであつた。

一般的に、真宗の教えは、具体的社会問題としての貧困や、あるいは地域福祉の問題

に対して行動を示さなさいといわれているが、それは福祉観のちがひにあるといつてよいだろう。そのどこをしっかりとおさえたうえで、福祉について語ることが、相互理解のうえで大切なものではなからうか。そこで次に、相互理解をより深めるために真宗の教えの基本にたちかえり、そこから社会福祉活動とは何か、と問ひ返していくことにしよう。

四、真宗の教えの方向性

真宗の教えを端的にいうとすれば、**念仏成仏**これ**真宗**ということだが、最も的確であろうと思う。そして、この念仏でもつて自己の立脚地を見出し、日々生かされていく人を、念仏者と呼ぶのである。

さて、先ほど真宗の教えに生きる人といつたが、それはとらわれからの解放を意味するものである。とらわれからの解放といつても、とらわれが消え失せるのではなく、とらわれはとらわれとして残るが、それが問題となつてこないという構造をもつてくるのである。

そのとらわれとは、自力のはからいによ

つて生ずるものである。自力のはからいによつて我が身の限界にとらわれていた自分に気づかされ、とらわれのない新しい立脚地を見出した時、命は生き生きとよみがえるのである。こうして、自己自身が疎外していた命を自己に戻らせ、いかなる境遇におかれようとも、それに真向いになつていける態度が確立されてくるのである。ここに仏恩報謝の念が生じてくるのも自然のなりゆきであらう。そして、かつての自己の姿と同じく、自己のはからいに苦しんでいる人々に対して、立脚地を見い出させるべく、仏の教えを説き伝えていこうとする、自信教人信という新しい課題が念仏者の使命として生まれてくるのである。

念仏者として仏恩に報いる行為としては、第一義的には、やはり自らの立脚地を見い出させてもらった仏の教えを、他の人にも伝えることだろう。そして、そこから類としての人間の共感が生まれ、御同朋としての歩みが始まるのである。

このように、真宗の教えにあつては、その究極的な方向は、命の具現にあることが知られるのである。まずこのことを、ここ

でしつかりおさえておくことにしよう。

この命の問題と関連することだが、いわゆる社会福祉活動を語ろうとする場合、どうしても看過することができないものがある。すなわち、前述のヒューマニズムの精神であるが、次に、このことについてみていくことにしようと思う。

五、ヒューマニズム

社会福祉活動の行動原理としての、福祉のこころとは何かと尋ねれば、たちどころに返ってくるのが、ヒューマニズムということばである。例えば、「福祉の原点たるヒューマニズムは何処へいつてしまったのか。(略)社会福祉の見直しということばは資金の配分や小手先の手直しでなくて、その原点たるヒューマニズムの再発掘でなくてはならないと思う」という問いかけをみても、このことを証明しているだろう。

ヒューマニズムは、ある時は実存主義の姿をとり、また、ある時はマルクス主義の猊となつて我々の前に現れてくる。しかし、どのように表現形態が変わろうとも、その共通するところは「人間の生命、人間の

価値、人間の教養、人間の創造力を尊重し、これを守りいつそう豊かなものに高めようとする精神」である。それは、いつてみれば、人間が、人間に対する、人間を中心にすえた働きかけである。

このように、ヒューマニズムは社会福祉活動の基本原理であり、その行動を支えているものであることが確認できたわけだが、あわせて、それは人間を中心にしたばかりであることも、あわせて知っておきたい。このことは、真宗の教えに生きる者の対人間行動の構造をみる場合に、大切なこととなってくるのである。

以上、おおよっぱな形で真宗の教えの方向性と今日の社会福祉活動の行動原理なるものをみてきたわけだが、このことを踏まえたうえで、本論の中心課題となつていくところの、真宗の教えに生きる者の社会福祉活動へのかかわり方についてみていくことにしよう。

六、真宗福祉活動の構造

これまで、真宗における社会福祉活動の行動原理を説明する手段として、往相廻向

・還相廻向の論理でもって説明されてきた歴史がある。往相・還相の二廻向は、真宗の教義上、重要な位置を占めるものである。それは簡単にはいいあらわせない構造をもっているが、あえていうならば、仏道を求めてひたすら法をきき、ひとたび覚者となつた(往相)後、再び娑婆世界に戻つて人々を救済する活動に入る(還相)ということである。

だが、この往相・還相の論理でもって、いわゆる社会福祉活動の行動原理としてとらえることは、その次元と基本的な原理のうえで無理があるように思われる。というのは、往相・還相の二廻向の論理は信仰生活の歷程のうえで語られることである。ここにおいて下化衆生としての還相廻向の内容とされるものは、弥陀の本願力によつて自己の立脚地を見出した人が、いまだ立脚地を見い出せず、なにごとにも真向になれないでいる人々に対して、「ここに道あり」と教化する活動をいうのである。その願いは幸せ追求ではなく、命の具現にあることは、すでに述べたとおりである。このように、次元も異なり、福祉観も異なるこ

とを吟味せぬままに、真宗の教えに生きる者の社会福祉活動の行動原理として、往・還二廻向でもって説明することには難ありといわねばならぬだろう。その他、どのような行動原理が用意されているか知らないが、真宗の教えにあつては、いわゆる社会福祉活動の動機たるものは出てこないのではないかとするのが、今日における筆者の基本的な考えである。

以上みてきたごとく、福祉観のちがいと他者へのかかわり方の基本的な立場のちがひによつて、真宗の教えからは、いわゆる社会福祉活動の動機づけは生まれてこないことが明らかになつたのであるが、しかし、動機とはならなくとも、その行動を支えるものとはなることを見逃してはならない。そこに、真宗における福祉活動の構造が成立する。

真宗の教えに生きる者の福祉活動の特異性はどこにあるかといえば、なにもできぬ私であることの自覚による行動にあるといえよう。たとえば、老人福祉ひとつ考えてみても、我々は老人そのものにはなりきれないのである。当然といわれればそれまで

だが、福祉を考える場合、このなりきれないということが極めて大事なことのように思うのである。なりきれないということの自覚をおさえたうえで、他者のいたみを自己のいたみとし、他者へ働きかけるといふ構造をもつ。この、なりきれないといふいたみを通してのヒューマニズム、これが真宗の教えに生きる者としての姿であらう。

人間が人間に働きかける形は、ヒューマニズムという形しかとれないとすれば、いまここにあげた形でのかわり方は、形はヒューマニズムであつても、もはやヒューマニズムを越えた、あるいは人間のはからいを越えたところのヒューマニズムといつてよいだろう。ここにあつては、他者と共に、働きかける自己そのものを、その働きかけの対象となつているのである。自己の分限を知るといふことは、同時に、その立脚地を見出すことであり、そのうえでの働きかけである。

そして、真宗におけるその目標とするものは、命の具現にあることは、すでにみたのとおりである。それは、生科学的な生命で

なく、脈々と流れる命そのものをさす。このたまわりたる命を、命として充分に全うできるよう努めるのが、基本的な願いである。その結果として、この命をそこなわしめるものがあれば、それと戦うということもでてくる。この命の発見は、人間をものごとの中心にすえているかぎり、見出し得ないという構造をもっている。生あるものへの共感が叫ばれる所以である。

結 び

以上、疎雑な形ではあつたが、真宗の教えは社会福祉活動の動機となり得るかという問を出発点として、ここまできたのであつた。

その結果、いわゆる社会福祉活動の動機にはなり得ないことがまず明らかになつた。しかし動機たり得ないといつて、何もなくてよいということでは決してなく、困っている人がいれば手を差し伸べようとするのが人情であらう。では、その場合、真宗にあつてはどのような形をとるのかというのが、次の課題であつた。一般的にそれはヒューマニズムとしておさえられている

のであるが、真宗にあつては、我がはから
いの限界性を自覚し、何もできない私によ
るところの働きかけであるという構造をも
つたものであることが明らかとなつた。

そのような構造のなかでさらに問題とな
つてきたのが、福祉観についてであつた。
そして、それは、幸せの追求ではなく、命
の具現であることが明らかになつたのであ
る。それはまた、人間中心主義的なものの
見方からは出てこないものであることも明
らかになつたのである。

真宗における福祉活動の構造を要約すれ
ば、以上のようなことにならうか。そして
最後に一言つけ加えるならば、真宗の教え
に生きる人すべてが、社会科学的な知識を
身につけ、社会を直視する眼をもつた時、
社会への働きかけは力強いものとなつてく
るであらうと思うのである。

註

- (1) 本願寺派・大谷派・高田派・仏光寺
派・興正派・三門徒派・出雲路派・山
元派・誠照寺派・木辺派。
(2) 浦辺史他編『社会福祉要論』ミネ
ルヴァ書房三四四～三四五頁

- (3) 『浄土真宗福祉白書・五二年版』浄
土真宗本願寺派六頁
(4) 『教育と教化・I』真宗大谷派一頁
(5) 浜島朗・徳永恂訳『現代社会学大系
5 ウェーバー』青木書店所収「社会学
の基礎概念」八五頁
(6) 前掲書八五頁
(7) 前掲書九六頁
(8) 中村元著『佛教語大辞典』下巻東京
書籍九二〇頁
(9) 森永松信著『社会福祉と仏教』誠信
書房三五〇頁
(10) 飯沼二郎著『イエスの言葉による行
動のための手引き』日本基督教団出版
局三九〇四三頁
(11) 前掲書一七一頁
(12) ハンス・リルエ著、伊藤・小林訳
『無神論・ヒューマニズム・キリスト
教』日本YMCA同盟出版部六七頁
(13) 糸賀一雄著『福祉の思想』NHKブ
ックス一〇〇頁
(14) 原文はほとんど平片名だが、わずら
わしさを避けるため、一部分漢字にか
えた。

- (15) 「よみはじめて、四五日ばかりあり
て、思かへして、よませ給はで、ひた
ちへは、おはしまして候しなり」(恵
信尼文書・第五通)
(16) 念仏成仏コレ真宗 万行諸善コレ
仮門ニ権実真仮ヲワカズシテ 自然ノ
浄土ヲエゾシラス(浄土和讃)
(17) 『月刊福祉』一九七八年四月号全国
社会福祉協議会六八頁
(18) 務台理作著『現代のヒューマニズム』
岩波新書四〇五頁
(19) 守屋茂著『仏教社会事業の研究』法
蔵館八八頁

☆	☆	☆	☆	☆
☆	☆	☆	☆	☆
☆	☆	☆	☆	☆